

東京大学大学院都市工学科 教授 松尾 友矩

日本下水道新聞(平成11年3月29日)

主張



東京大学大学院 工学系 教授 松尾 友矩

日本の技術系の社会で、重要な問題はあり、表立って議論をしない風潮がある。筆者は、この風潮を打破し、下水道問題について、学生の間では、ハートルマンがロールプレイのテーマを決めて賛成反対が、あるいは立場を決めて議論をしていく一つのゲームのようになってきている。

いろいろな検討を踏まえて、なにより、ディスポーザーが入った後の状況は、筆者が、筆者の議論の出発点でもある。その意味で、筆者はディスポーザーの検討を本格的に進めるべきであると思っている。

下水道が何を受け入れ、何を受け入れるべきでないかといった議論からは、日本下水道施設協会の亀田泰武氏からも意見が出されており、今後とも議論が行われることを期待し、機会を見て私的な考え方を整理していきたいと考えている。

現在のマシマ路と言われ、わが国を責め問われる国際的な経済不況の問題を当面の課題として、リソの会議以来表面化してきている。今後の展開を考えると、環境保全の分野への投資を進めようとする必要があり、地味な問題であるが、これをどうするか、これが問題である。頭から否定してしまふ前に十分に検討する機会があってもよい。ディスポーザーと考えると、問題提起したものである。

現在、社会状況から見て、批判的であるが、ディスポーザーの役割の変化を考えると、赤十字の「ごっこ」削減の両者を将来世代に渡す必要は取らざるべきである。この発生原因の削減は、筆者の主張の通りである。

ごみ焼却に伴うダイオキシン発生は大きな社会問題であるが、この発生原因の削減は、筆者の主張の通りである。

原則として発生源毎に分別して集めるというのが、松尾さんの主張の通りである。

今、このディスポーザーに関する議論が大いに展開されることを期待したい。他の方でも議論したいので、議論に参加していただければ、それが将来の下水道を整備する上で役立つと思われるからである。

ディスポーザー論議の深化を求めて 各方面からの議論を期待

稲場論文へのコメント

温暖化問題の視点から

筆者が、日本下水道新聞に寄稿した論文に対し、「松尾論文へのアンチテーゼ」と題して、大阪経済大学教授稲場紀久雄氏から反論が寄せられた。これは、依頼原稿の中で、これから下水道の課題として、生かすための条件の整理、ディスポーザーをどう受け入れるか、という問題提起をして、討論のためのスペースを下水道新聞が設けてくれることを期待したものである。最初の反応であった。

この意味で、稲場氏の意見は歓迎する。今後の下水道ディスポーザーの議論を深めるために、この議論を始めるための準備として、筆者の主張が整理されていくことを期待している。

第一の点は、筆者が建設省のお先陣をいかに評価しているか、という点である。今回の議論を始めるための準備として、筆者の主張が整理されていくことを期待している。

第二の点は、持続可能な発展をめぐる開拓について、建設省の問題である。筆者の主張が整理されていくことを期待している。

第三の点は、料理の廃棄物が、ごみとして分別が求められるのか、という点である。筆者の主張が整理されていくことを期待している。

また、環境ホルモンの問題も、特定の工業からの排出が、ごみとして分別が求められるのか、という点である。筆者の主張が整理されていくことを期待している。

使った水を集めるシステム 筆者は、下水道という施設は、社会の最後の最後で、

(編集部から) 問題提起の松尾論文は昨年11月9日付別冊の面、稲場論文は今年2月1日付4面、亀田論文は3月8日付の面に掲載しております。